数十年ぶりの姉妹喧嘩 in London

札幌市医師会
白いあさがお皮ふ科スキンケアクリニック
福田（ふくだ）　朝子（あさこ）

私は旅行が大好きだ。知らない土地の景色や空気、その土地ならではの飲食を楽しむ非日常は、何よりのリフレッシュになる。勤務医時代は子どもも小さく有給も調整しやすかったので家族旅行によく行った。

しかし最近は、長男は中学生、次男も小学生になり、休日は野球一色。夫も旅費を払うわけではないので「付き合ってあげる」のスタンスを崩さない。もちろん試合観戦は楽しいし熱も入るが、当番や送迎、帰宅後の泥洗いで、あっという間に休日が終わる。そんなストレスたっぷりな母親（あるいは妻）は放出した方が家内安泰と考えたのだろう。「ママ一人で行って来たら？」と長男が言い出した。夫も次男も快く同意。相変わらず我が家での母親の存在意義は薄い。そんな訳で、３年前からGWは別行動をしている。男性陣は知床や利尻への車旅を、私は妹が海外赴任中のため、一昨年は香港、去年と今年はパリに会いに行った。昨年は時差ボケが酷く、予約したレストランで連日寝てしまう大失態をしたので、今回は体調管理（飲酒量管理とも言う）を頑張るつもりだった。私も妹もシャンパーニュが好きなので、３日目はReimsでワインカーブの見学と試飲、その後妹が常連のお店を予約していた。

しかし眠気と疲労に勝てず、私は部屋に戻って仮眠をしたくなったが、妹はせっかく日本から来たのだから、沢山ワインショップ巡りや試飲をしてもらいたいと思っていた（ようだ）。そのために事前に下調べをし、分刻みに計画を立てていた。それなのに、肝心の姉が乗り気ではないもんだから、ムッとした素振りをした。こちらも少しムッとする事はあったが、久々の再会なのでお互い大人の対応で楽しく過ごした。翌日ロンドンに移動し、私はスコーンを楽しみにしていた。妹はフレンチ続きの胃を和食系でリセットしたかった。結局近場の中華でランチ。中華も大好きだが、スコーンはどうするのだろうかと内心気になっていた。夜はバスク料理を予約している。

すでに15時、スコーン食べれる？案の定、妹の頭にスコーンはなかった。少し残念だったがそれについては触れなかった。しかし、私の中で疲労と眠気とスコーンが尾を引いていたのかもしれない。妹もそれまで不満を抑えていたのだろう。バスク料理屋でついに事件勃発。何かのはずみに、「そんな押しつけみたいな態度を取られたらゲスト側だって断れないよ」と口が滑った。妹が黙り込んだので見ると、泣いているではないか。「え？なんで？今泣く所？」とさらに言った。もう涙が止まらない。「お姉ちゃん、私の好意を押し付けだってずっと思っていたんだ」。こうなるとネガティブ思想が止まらないのが我々姉妹。最初こそ、ごめんねごめんね。と、明るめに優しい口調で謝罪したが、段々面倒になってきた。まれに現れるヤンキー朝子がロンドンの中心で出現してしまった。「いい加減にしなよ！ロンドンまで来ていつまでもめそめそするな！」。あ～やっちゃった。食事も早々に切り上げホテルに戻った。妹はおそらく姉に怒鳴られた記憶はないだろう、予想外すぎてビビったか、完全にブチ切れたか、終始無言ですぐにふて寝してしまった。連休に家族を放置してまで来て一体何をやっているのだろうと悲しくなった。

気分転換にホテルのバーに行き２杯ほど飲み部屋に戻ったら、ドアノブに「Not now」の札がかけられていた。起きてたんかい!?いっそ別の部屋をとり、明日にでも日本に帰ってしまおうかと考えたが、ほとんどの荷物はパリの妹の家にある。外では酔った若者が黄緑のランボルギーニをふかして大騒ぎしている。怖いからすぐに戻ったがやはり札はそのままである。部屋に入って仲直りするのが正解であろうが、負けず嫌い姉妹はお互いに譲れない。部屋の前で立ちっぱなしで疲れたのでとりあえずドアの前に座って考えようと思った。おそらく３秒で寝たと思われる。気が付いたらホテルの廊下で爆睡していた。ふかふか絨毯のおかげで予想外に快眠だった。

朝４時、こっそり部屋に入り、目が覚めると妹はすでに起きていた（もう昼の11時だった）。しばし寝たふりをしていたら、妹から声をかけてきた。「次男の欲しいぬいぐるみ、デパートにありそうだから行こう」と。妹のほうが大人だった。オペラ座の怪人を観終わる頃にはすっかり仲直りし無事パリに戻れた。うぬぼれかもしれないが、妹は姉の事が大好きである。私のために何日も有給を使い、一生懸命準備してくれていた気持ちを思うと、傷つけて本当に可哀そうなことをしたと心が痛む。

最終日の夜、自宅でとびきり高いシャンパーニュを開けてくれ深夜まで語った。いつもより空港での別れがとても寂しかった。雨降って地固まる、とはまさにこのことかもしれない。どちらかが死の淵に立った時、きっとこの事を思い出すに違いない。そして毎年一緒に旅行したいと思う。がしかし、願わくば来年以降の旅行では喧嘩は避けたい。